

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】藤原 敬介

【所属】(助成決定時)京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

【研究題目】

チベット・ビルマ語派ルイ語群の基礎語彙調査による比較研究—カドゥー語・ガナン語を中心に—

【研究の目的】

チベット・ビルマ語派ルイ語群に属する言語の研究は、応募者が博士論文において網羅的に記述したチャック語(バングラデシュ・チッタゴン丘陵)をのぞけば、いまだに手つかずである。ルイ語群のなかでも、ビルマ・ザガイン管区ではなされるカドゥー語とガナン語については、流暢な話者がそれぞれ 1 万人以下であると推定され、調査は緊急を要する。応募者は 2007 年に 1 ヶ月ほど両言語について予備的な調査を実施した。その結果、これらの言語が、同系のチャック語と比較して、語彙のみならず、文法的にも類似していることを発見した。さらに調査をすすめることにより、チャック語を記述するだけではわからない現象が、説明しうる可能性がたかい。本研究では、カドゥー語とガナン語の基礎語彙調査を通じて両言語の概要を把握し、ルイ語群の言語特徴をあきらかとすることを目的とする。

【研究の内容・方法】

本研究は、ビルマにおける、記述言語学的手法による臨地調査が中心である。具体的には、助成期間中に以下のような研究を実施した。

- (1) 2009 年 10 月～12 月 予備調査で収集したカドゥー語・ガナン語の基礎語彙の整理。資料の電子化と問題点の整理。応募段階で懸案となっていたのは、(a)声調体系がどうなっているか、(b)摩擦音としての s と sh に対立があるかどうか、(c)語末子音として p,t,k などがあらわれる環境がどのようになっているか、といった問題であった。(2) 2009 年 12 月～2010 年 1 月 ビルマに渡航し、3 週間ほど滞在。ヤンゴンやマンダレーに居住するカドゥー人・ガナン人に協力を依頼し、再度の基礎語彙調査。調査票として、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の新谷忠彦教授による『シャン文化圏言語調査票』を使用した。両言語ともに 2000 語程度の基礎語彙を収集。(1)であげた問題点について、(a)についてはカドゥー語で四声調、ガナン語で三声調が対立していることを把握した。(b)については、カドゥー語でもガナン語でも、s と sh は対立していることがわかった。すなわち、s であらわれるものは、母音間などでは有声音の z と交替しうるのに対し、sh はいかなる環境にあっても有声音化しない。つまり、s と sh の対立は、音韻論的には /z/ と /s/ の対立へと還元しうることをつきとめた。両言語ともに、ほかの調音点についても、無声無気音と有声音とのあいだに対立がないこともわかった。(c)については、語末子音と拘束形態素の連声規則を把握することができた。
- (3) 2010 年 3 月 再度ビルマに渡航し、4 週間ほど滞在。(2)でおこなった臨地調査の資料について、再確認。最終的にカドゥー語で 3000 語、ガナン語で 2500 語ほどの語彙資料を収集。基本的な文法も調査できた。民話資料も録音したが、分析するにはいたらなかった。
- (4) 2010 年 4 月～9 月 収集した資料の分析および研究発表。具体的な成果については次項にのべる。

【結論・考察】

本研究により、以下の二点があきらかとなった。

カドゥー語では四声調、ガナン語では三声調が弁別的である。ただし、両言語ともに、基本的には高声調と中声調のみが対立する。カドゥー語とガナン語における低声調は、基本的には、高声調の直後にあらわれる中声調が変調した結果としてあらわれる。低声調の一音節語の場合は、通時的には接頭辞が先行する。カドゥー語における四つ目の声調である緊喉調は、中声調のあとにあらわれる低声調が変調したものである。

カドゥー語、ガナン語をチャック語と比較することにより、文法的な面において、(a) 移動にかかわる助動詞が三言語で共通する、(b) 類別詞と数詞の共起関係が三言語で共通する、(c) 名詞修飾表現にもちいられる小辞が属格標識としてもちいられる、といった言語特徴が共有されることがわかった。

本研究に関連する成果は以下のとおりである。

2010年5月15日 「カドゥー人とその言語」2010年度ビルマ研究会(亜細亜大学)

2010年7月7日 ``Burmese loanwords in Kadu'' 第9回国際ビルマ研究集会(フランス・プロバンス大学)

2010年7月24日 「チベット・ビルマ語派ルイ語群の言語特徴」第21回チベット・ビルマ言語学研究会(京都大学羽田記念館)

2010年11月27日 「ガナン語における低声調について」日本言語学会第141回大会(東北大学)、『予稿集』pp. 164-169.